

実践報告

本学看護学生における異文化体験を通しての
コミュニケーション能力と英語学習意欲森 久子¹ 鈴木 寿摩²

要旨

本研究は、3 週間の英国研修旅行での異文化体験が参加学生の「コミュニケーション能力」と「英語学習意欲」にどのような影響を与えたかを検証する。参加学生が異文化の中での生活をどのように感じ、適応していったか、その体験が学習意欲にどのように影響を及ぼしたかを研修前と後でアンケート調査を行った。その結果「コミュニケーション能力」「英語学習意欲」ともに向上がみられた。またその要因となったのは異文化の中でのホームステイ体験、英語だけを媒体とした語学学習体験であったことが浮き彫りとなった。“Willingness to communicate”、すなわち「自発的にコミュニケーションを行う意思」が高まったことにより、今後の英語学習意欲の向上のみならず、学習態度、生活態度、人間関係全般により影響を及ぼすものと期待される。

キーワード 短期語学研修、異文化体験、コミュニケーション能力、英語学習意欲

I. 背景と目的

日本では在籍する大学主催の研修旅行への参加、あるいは大手の旅行会社主催の個人参加も含め、海外に出かけて語学研修をする若者の数は多い。Institute of International Education のデータによると 2012 年から 2013 年にかけての 1 年間の米国での日本人留学生の数は 19,568 人であり国別で上位 7 位に位置する (IIE, 2013)。文部科学省も「グローバル人材育成推進事業」のもとグローバルな舞台で活躍出来る人材育成を図るため、大学教育のグローバル化を推進している (2011)。日本赤十字豊田看護大学でも、赤十字の理念に基づき多くの医療施設・教育施設で活躍できる看護師の育成はもとより、国内および国際救援にも貢献できるグローバルな看護専門職の育成を教育目標に掲げている。しかしながら、本学の学生は専門が看護学であり、過密なカリキ

ュラムも影響してか、在学中に海外研修に参加する学生数は少なく、短期の留学も含め海外での生活経験に乏しい。英語は 1 年次と 2 年次で必修科目として単位を修得し、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、中国語も選択科目として修得が可能であるが、授業以外では学内で異文化に触れる機会はほとんどないのが現状である。そのことにより語学習得の意義や目的が見いだせず、英語教科への学習態度も積極性に欠けることが多い。英語を使って外国の人と交流したいという動機や、コミュニケーションを取りたいという意欲、すなわち、“willingness to communicate” (WTC) は学習意欲にも影響を及ぼす可能性は高い。学習意欲向上のためにも異文化に接する環境を提供することが重要になってくる。

本学では 2013 年 3 月 2 日 (土) から 3 月 25 日 (月) の約 3 週間の日程で英国の Plymouth で語学研修が行われ、11 名の学生が参加した。これは 2005 年度以来、本学で毎年行われている研修旅行で、毎年 10 名から 20 数名の希望者が参加している。この研修旅行の目的は海外

¹ 日本赤十字豊田看護大学 准教授

² 日本赤十字豊田看護大学 非常勤講師

で異文化を体験することによって、語学力、学習意欲の向上はもとより、価値観の相違を理解し国際的な視野を身に着けること、自分の家族と離れて一人でホームステイをすることにより心理的自立を促すことである。また本学が看護大学であることから、語学研修とともに英国の病院など医療機関を訪問し医療の現場を見学して医療従事者と接することも目的としている。

異文化を体験することによる学習意欲、異文化理解、自己成長に関しては、効果があるとする研究が多い (Asaoka and Yano, 2009; Dwyer, 2004; Kawauchi, 2006)。本研究では、3 週間の英国での体験が本学の参加学生の異文化コミュニケーション能力にどのような影響を与えたか、また今後の英語の学習意欲にどのような変化があったかについて焦点を当てて検討する。

II. 研修の概要

本研修は英国南西部に位置する Plymouth でおこなわれ、希望者 11 名が参加した。3 週間の Plymouth 滞在中は語学学校が提携する市内の一般家庭でホームステイをした。平日（実質 15 日間）は民間の語学学校において午前 9 時 15 分より 12 時 30 分まで英語の授業を受講した（添付資料 1）。授業は英国人教師によってすべて英語で行われた。他国からの参加者とともに 5 人から 7 人程度の小クラスに分かれ、教室内の共通言語は英語のみであった。午後には本学が依頼した医療機関を 5 か所訪問した（添付資料 2）。医療機関では、英国の医療制度、看護師制度、看護教育、英国が抱える健康問題について、簡単な講義やプレゼンテーションを聴き質疑応答を行い、施設内を見学した。訪問中は引率教員が通訳を行ったが、学生が聞き取れると思われる簡単な説明などは通訳を省いた。本学では 1 年次、2 年次必修の英語授業において医療・看護の英語を学習しており、医療機関の訪問では学習した医療英語を現場で確認する機会となった。また Plymouth University では看護師や看護学生との交流の場を設け、共通の話題を話し合った。訪問の予定がない午後は各自で買い物などを楽しんだり週末には近隣観光地への小旅行をした。その際各自で鉄道の切符を購入し、自由行動の後は引率なしで各自帰宅するなど、できる限り自立を促す機会を設けた。

III. 研究方法

本研究は、今回研修に参加した学生 11 名を対象とした。研究方法としては、研修前後に各 1 回アンケートを実施することにより、本研修が学生の異文化理解、コミュニケーション能力、および英語の学習意欲に及ぼす影響を調査し考察した。アンケート実施に際し、対象者に調査への参加は任意であることを説明し、アンケートの提出をもって同意を得た。またアンケートはすべて無記名であり個人が特定できないように配慮した。

研修前アンケートでは、英語学習への意欲、異文化に対する理解、自分のコミュニケーションスタイル、および海外研修に対する不安や戸惑いなどを質問した。大半の参加学生にとってホームステイは今回が初めての経験であり、ホームステイが最も不安要素であることが予測された。その不安な感情をより臨場感をもってアンケートに反映させるため、アンケート用紙を出発時に空港で配布し、ホームステイ宅到着直前に用紙を回収した。回収率は 100% であった。

また研修後アンケートは、研修全体を落ち着いて振り返ることができるように、研修から 3 週間後に配布し、回収した。参加学生 11 名の内 10 名が回答した。研修後アンケートでは本研修が英語学習に対する意欲、異文化理解、コミュニケーションスタイルなどに変化を及ぼしたか、またどのような要因が影響したかに焦点を当てて質問した。

IV. 結果と考察

1. 英語力の向上

まず、英語能力向上に関して参加学生が帰国後どのように感じたかを検討する。帰国後のアンケートで「どの分野が伸びたと感じるか」の問いに対して表 1 のような

表 1 研修後、英語力のどの分野が伸びたと思うか

1. Writing	0
2. Reading	1
3. Listening	7
4. Speaking	5
5. Communication	7
6. Grammar	0
7. Words and phrases	0

(2 項目選択)

回答が得られた。

この結果から、listening, speaking, communication の分野が「伸びた」と感じている学生がほとんどであることがわかる。これらは明らかに対人関係を含む分野であり、単独の机上だけの勉強でなく、人と接しながら学ぶ分野である。またこれらは海外研修ならではの分野であり、このことから短期であっても海外での異文化体験が listening, speaking, communication 能力の向上に大いに貢献する可能性があると言える。言い換えれば、本学のように学内で異文化に接することが少ない環境では、机上での英語学習に加えて海外研修のような異文化体験をすることが listening, speaking, communication 能力を向上させる可能性が高い。

短期海外研修が学生の英語能力に及ぼす影響は、様々な研究がなされているが、Freed (2008) が述べているように語学力向上を測る指標が明確でない。また、Coleman (1997) も対象者の本来の英語力、性別、性格、滞在期間の長短、期間中の英語での交流の密度など環境が異なることが研究をより複雑化していると述べている。しかしながら、それぞれの分野 (listening, speaking, reading, writing, communication 等) の内、海外滞在によって listening と communication 力が向上することは多くの研究者 (Eguchi, 2010; 木村, 2006; Matsumoto, 2010) が報告している。本学の 2011 年の研修旅行の事例を見ても、英語力全体での高い伸びは認識されなかったものの、listening と communication 能力に関しては成果が認められている (Mori, 2012)。今回のアンケートでも、listening と communication の能力が向上したと感じている学生が多いことが確認された。

次に、自分の英語力が伸びたと思う時、その要因は何であったかに関する自由記述の質問では表 2 の回答を得た。

表 2 問 1 で選んだ分野の向上は滞在の何が要因であったと思うか

1 人でのホームステイをしたから	7
他の国の人と交流したから	2
語学学校の授業に参加したから	2
英語しか通じない環境にいたから	3

(複数回答)

上記で挙げられた要因はすべて母語が通じない環境でコミュニケーションを取ることを強いられたということである。これらは本学の英語授業では決して体験できない海外での研修ならではの要因である。このような環境

がいかに英語力向上に貢献したかがうかがわれる。特に、多くの学生がホームステイや語学学校の授業が最も listening と communication 力の向上に貢献したと実感したようだ。中でも回答者 7 名が英語力向上の要因としてホームステイを挙げていることは注目に値する。多くの研究者 (Farmanovsky, 2007; 花見, 2002; Iino, 2006; 松田, 2007) が報告しているようにホームステイでの体験がいかに貴重なものであったかがうかがわれる。MacIntyre et al (2001)、Yashima (2002) など、多くの研究者が外国語習得の動機を高める要因として “Willingness to Communicate” (WTC)、すなわち「自発的にコミュニケーションを行う意思」を挙げている。日常生活を支援してくれるホストファミリーとの密接な交流を通してこの WTC が高まり英語習得の動機に繋がった結果、listening, speaking, communication の力が向上したと考えられる。

2. 異文化体験

次に滞在中体験したことに関しての自由記述を検討する。「今回英国研修に参加して、言葉以外でどんなことに一番とまどいましたか。」との問いに対する回答でも、ホームステイでの体験が一番インパクトを与えたことがうかがえる (表 3)。

表 3 言葉以外でどんなことに一番とまどったか

ホームステイで一緒だった他国の学生がよくしゃべったので物怖じした。
ホームステイの家族の生活リズムが分かるのに時間がかかった。
自分勝手に行動出来なかった。
やるべきことを即座に片づけ就寝するなど規則正しい生活をする。
毎日シャワーのみであったこと。
食生活が違ったこと。
イギリス人が雨の中でも傘をささないこと。
部屋の中で靴履きであったこと。
授業中に日本人はすぐにノートに書くが、外国の学生は書かずその場で理解し話す。
ホストファミリーが自由に家の中の物を使わせてくれたこと。

親元を離れ 3 週間も他人の家に一人で滞在する経験は初めての学生も多かったと思われる。ましてや言葉が自由に通じない異文化の中での生活は彼らにとっては大きなプレッシャーであり、とまどうことが多かったに違いない。異文化理解とは、価値観、習慣、行動様式の相違を体験し、それまでの固定観念や先入観を越えて相手を受け入れることである。また自分も受け入れてもらわなくてはならない。そのためには苦痛を伴うことも多く、忍耐力、寛容力が求められる。また異文化、多文化の中でストレスに対処する心理的適応能力も求められる。今

回の研修で、今までは当然と思っていた日本の文化や生活様式が海外では当たり前でないことを体験し、戸惑いながらも適応していったようである。学生の帰国後の様子からしても、この経験が決してマイナスの要因とはならず、かえって自己成長につながったようである。

3. コミュニケーション能力

今回の研修を通して「学んだこと」あるいは「驚いた」ということを自由記述させた（表4）。

表4 ホームステイ、語学学校の授業において、学んだこと、驚いたこと

完璧な英語でなくても、自発的に発話することが重要である。
あまり恥ずかしいと思わず発言すること。
理解できなかった場合はあいまいにせず、徹底的に質問することが必要である。
受け身ではなく、積極的に話しかけることが友人関係を築くには必要である。
クラスの中で他の国からの学生がつかない英語でも物怖じせずに話す姿に驚いた。
携帯電話をいじっている人が日本と比べて少ない。
語学学校のクラスメート(他国の学生)と先生が時間にルーズだったこと。

上記の回答にはコミュニケーションに関する記述が多くあった。語学学校では日本以外の国からの学生も多く学んでおり、英国以外の文化に接触する機会も得ることができた。他国からの学生にとっても英語が外国語であるという環境である。しかし、英語のみで行われる授業の中で彼らが積極的にコミュニケーションを取る態度を目の当たりにして、本学の学生は驚くと同時に積極的な態度が重要であると認識し、身に着けたいと感じたようである。授業では自分が自発的に発話しなければ、参加できず取り残されてしまうからであろう。また他国の学生が積極的に教員や他の学生と人間関係を構築していく姿に触発されたことも一因であろう。英語能力も決して自分より高いとは言えない同年あるいは年下のクラスメートでさえ自立した態度で積極的に発言している姿勢は、参加学生にとって大きな驚きであり、その姿勢に触発されたに違いない。日本人学生の姿勢が海外研修を通してこのように他国のクラスメートと積極的にコミュニケーションを取ることでにより変化する様子は Farmanovsky（2007）などの研究者も報告している。ホームステイ先でも恥ずかしがっていたり英語が完璧ではないからと消極的になったりしては家族の一員として受け入れてもらえず生活が成り立たない。また温かく迎えてくれるホストファミリーとつかない英語でもコミュニケーションを取りたいという意識が働いたのではないと思われる。ホームステイ先によっては本学学

生と他国からの学生を同時に受け入れていた家庭もあり、その同年代の学生の積極的な態度にも触発されたようである。

コミュニケーション能力とは、相手の文化的背景、生活習慣、価値観の相違を理解した上で、良好な関係を構築する能力である。一言で異文化を体験することによる「コミュニケーション能力」と表現する中で、それに至るまでの様々な要因がある。今回の研修を通して、学生たちがそれぞれの英語力に関わらず、とまどいながらも積極的にコミュニケーションを取ることでより人間関係を構築することが異文化の中で必要であることを学んだことが、アンケートから確認できた。国際化が今後ますます促進される中で、コミュニケーションを取るのに必要な要素として、言語能力がまず優先されがちであるが、国際化社会で求められるものは決して言語能力のみではない。実際には言語のみによるコミュニケーションは半分にも満たないとされる（Mehrabian, 1971）。多くのコミュニケーションは非言語的なシグナル（body language）によってなされる可能性が高い。アンケートの回答から、今回の研修を通して、学生がコミュニケーションを取るのに何が自分に必要かを体験によって学んだように見受けられる。

次に、学内では異文化に触れる機会に乏しい本学の学生がこの研修を通して外国人に対する姿勢がどのように変化したかを検討した。研修前と研修後のアンケートを比較することで彼らの外国人への態度の変化を見た（表5）。

表5 外国人が路上で道に迷っていたら、積極的に話しかけるか

	研修前 (n=11)	研修後 (n=10)
1. 特別何もしない	9	3
2. 話しかけられないようにする。	0	0
3. 話しかけられたいので、笑顔を送ったりしてアピールする。	0	3
4. 自分から話しかける。	2	4

この結果を見る限り、研修後では明らかに積極性が伸びている。研修前では「特別何もしない」学生が大半であったが、研修後では回答者 10 人中 7 名の学生が積極的にコミュニケーションを取る態度を示している。表4で示したように、異文化の中でいかに積極的な態度が必要であることを学んだからであると思われる。「完璧な英語でなくても、自発的に発話すること」、「あまり恥ずかしいと思わず発言すること」、「受け身ではなく、積極

的に話しかけることが友人関係を築く」ことを学び、それを実践したいという気持ちの現れであろう。たった3週間の滞在であったことを考えるとこの積極性の伸びは驚くべき変化である。

4. 学習意欲

海外での勉学や活躍に対する意欲に関しても変化が見られた。将来、チャンスがあれば海外で活躍したいか否かの問いに対して、「はい」と回答したものは、研修前は回答数 11 人のうち 9 人、研修後では回答した 10 人全員であった。また「いいえ」と否定的に回答した学生は、研修前は 2 人いたが研修後はひとりもいなかった（表 6）。

表 6 将来、英語力があれば海外である程度長く勉強したり働いたりしてみたいですか

	研修前 (n=11)	研修後 (n=10)
はい	9	10
いいえ	2	0

今回の参加者は海外に対する興味や学習意欲があるからこそ参加したのであって、研修前からこの問いに対して肯定的な回答は予想されることであった。しかし英語が思うように伝わらない不自由な環境を体験しその中で孤立してしまい、海外での生活に対して消極的になってしまう可能性もあった。その中で研修後、回答者全員が「英語力があれば海外で活躍したい」と答えており、消極的になった学生は 1 人もいない。これは大きな成果であった。

「英語は好きか」というアンケート項目においても、研修前より研修後において肯定的な回答が増した（表 7）。

表 7 英語は好きか

	研修前 (n=11)	研修後 (n=10)
1. 大好き	1	3
2. 好き	9	7
3. どちらでもない	1	0
4. 嫌い	0	0
5. 大嫌い	0	0

この問いに対しても、参加者がこの研修旅行に希望して参加したからには、英語に対して興味を持っていたのは当然であるが、帰国後自分の英語能力の乏しさに失望して英語学習に意欲的でなくなる可能性もあったはずである。参加者全員が肯定的な回答を選んだことは今回の研修旅行の大きな成果であったと思われる。今回の研修旅行で異文化に接して海外に目を向けることができ、異文化コミュニケーションを取るためにはいかに英語力が必要かを認識したのである。そのことが表 7 の結果が示すように、英語への興味が増したという結果に結び付いたと思われる。短期海外研修体験が学習動機や学習行動へ有意な変化をもたらすという結果は香月（2011）など他の研究者の報告にもあるが、今回の研修旅行でも、学習意欲への動機づけに効果があったことが確認された。また Nakayama（2013）は、その英語学習に対する動機づけが持続すると述べている。このことから今回の研修が彼らの今後の英語学習への態度に良い影響を及ぼすにちがいない。

V. 結論

参加学生へのアンケートを通して、今回の研修旅行の成果を「コミュニケーション能力」、「学習意欲」に焦点を当てて検討した。その結果「コミュニケーション能力」、「学習意欲」共に成果が認められた。

コミュニケーション能力は、いわゆる「海外での異文化」のみではなく、将来看護師として活躍するにあたって、異なった社会環境に入った時の「自国社会での異質文化」適応にも必要な能力である。看護師として活躍する上で、良好な人間関係を築くのにコミュニケーション能力は必要不可欠なものである。今回の研修を通して、語学力に加えて、積極性、相互理解、心理的自立が必要であると感じた学生が多い。また、それらを身に着けることに対して前向きにとらえている姿も浮き彫りにされた。

「学習意欲」に関してもすべての学生が積極的な態度を示している。積極的に異文化コミュニケーションを取りたいという意欲は語学学習意欲に強く結びつくものである。英語のみが共通語である中、一人でホームステイをし、授業に参加したことが“willingness to communicate”（WTC）を高め、学習意欲に結び付いたと思われる。今回の体験が今後の英語学習のみなら

ず、学習全般への態度、それに伴う生活態度に与えた影響は大きいものであろう。このことが今後の本学での勉学に対する態度のみならず、彼らの人生における学習態度にも良い影響を及ぼすことが期待される。

またアンケート結果から参加者全員が今後海外で長く滞在したり、活躍したいと望んでいることが明らかとなった。単なる観光名所を訪ね回る団体旅行ではなく、現地の語学学校に通い一人でホームステイをするという研修旅行ならではの体験が、いかに彼らに良い刺激を与えたかがうかがわれる。異文化の中でコミュニケーションを取り信頼関係を築くにあたって、いかに異文化理解、積極性が必要かを無意識の中で学んでいく姿が浮き彫りになった。海外で働かなくても今後彼らが活躍する赤十字関連施設や病院においても国際化はさらに進むであろう。たった3週間ではあったが今回の体験が将来看護師として活躍する上で彼らの人間関係全般に良い影響をもたらすことが期待される。

引用文献

- 1) Asaoka, T. & Yano, J. (2009). The Contribution of "Study Abroad" Programs to Japanese Internationalization. *Journal of Studies in International Education*. Vol. 13, No. 2. 174-188.
- 2) Coleman, J. A. (1997). Residence abroad within language study. *Language Teaching*. Cambridge University Press. 30, 1-20.
- 3) Dwyer, M. (2004). More is Better. The Impact of Study Abroad Program Duration. *Frontiers: the interdisciplinary journal of study abroad*. 10, 151-164.
- 4) Eguchi, H. (2010). The effects of a short-term overseas English program for Hokusei Gakuen University English Department students. *Hokusei review, the School of Humanities*. 47(2), 33-49.
- 5) Farmanovsky, M. (2007). Making Sense of the Ryugakusei Experience: Japanese Students' Reflections of Classroom and Homestay-based Intercultural Experiences in a Short Term Australian University Language Center Program. *Ryukoku International Center Research Bulletin*. Vol. 16. 109-120.
- 6) Freed, B. (2008). Second language learning in a study abroad context. In Van Deusen-Scholl, N. & Hornberger, N. H. (Eds). *Encyclopedia of language and education: Second and foreign language education* 2nd ed., Vol. 4. New York: spring 113-125.
- 7) 花見 槇子. (2002). 三重大大学の学生海外語学研修プログラムの現状と展望：第2回タスマニア大学語学研修結果に基づいて. 三重大学留学生センター紀要. 4号. 37-47頁.
- 8) Iino, M. (2006). Norms of Interaction in a Japanese Homestay Setting: Toward a Two-Way Flow of Linguistic and Cultural Resources. In M. A. DuFon & E. Churchill (Ed.). *Language Learners in Study Abroad Contexts*. (pp. 151-173).
- 9) IIE (Institute of International Education). (2013). *Open doors*, 20/13 "Fast Facts".
- 10) 香月 毅史. (2011). 短期海外研修体験が看護学生の英語学習動機と学習意欲に及ぼす影響. 高崎健康福祉大学紀要. 第10号. 47 - 61頁.
- 11) Kawauchi, K. (2006). Change in Intercultural Adaptation and Anxiety of Japanese University Students. *Journal of Aomori University of Health and Welfare*. 7(1) : 37-44.
- 12) 木村 啓子. (2006). 英語圏滞在が学生の英語力に及ぼす影響：短期語学研修により英語力は向上するか. 尚美学園大学総合政策研究紀要. 12号. 1-20頁.
- 13) MacIntyre, P.D., Baker, S.C., Clement, R., & Concord, S. (2001). Willingness to communicate, social support, and language-learning orientations of immersion students. *Studies in Second Language Acquisition*. 23, 369-388.
- 14) 松田 康子. (2007). 短期海外研修の意義とその事前研修について— 学生の報告書とアンケート調査の結果から— . 名古屋文理大学紀要. 7号. 45 - 50頁.
- 15) Matsumoto, M. (2010). English Listening Skill's Improvement in the Short-term Overseas Program. *JACET Annual Review of English Learning and Teaching*. 15. 57-65.
- 16) Mehrabian, A. (1971). *Silent Messages*. Belmont, Wadsworth.

- 17) 文部科学省. (2011). 「産官学によるグローバル人材育成推進会議」最終報告. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf.
- 18) Mori, Hisako. (2012). The Effects of a Three-week Study Abroad Programme in Plymouth for Japanese Nursing Students. *Journal of Japanese Red Cross Toyota College of Nursing*, Vol. 7(1), 85-96.
- 19) Nakayama, Asami. (2013). Motivational Changes through Study Abroad Experience in the U.K. *JACET Chubu Journal*. Vol. 11. 63-76.
- 20) Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*. 86, 55-66.

添付資料 1

日程

日	曜	午前	午後
2	土	中部国際空港発	
3	日	London 着 → Plymouth 着後、各 Host Family の出迎え	
4	月	Mayflower 校長による Orientation 09:15－12:30 授業	Plymouth の街を散策
5	火	09:15－12:30 授業	
6	水	09:15－12:30 授業	
7	木	09:15－12:30 授業	
8	金	09:15－12:30 授業	語学学校でのパーティー
9	土		英国赤十字社 Plymouth 支社訪問、消防署見学
10	日	Mt. Edgcumbe 観光（自由参加）	
11	月	09:15－12:30 授業	Derriford Hospital 訪問
12	火	09:15－12:30 授業	Totness 散策（自由参加）
13	水	09:15－12:30 授業	Peverell Park Surgery 訪問
14	木	09:15－12:30 授業	
15	金	09:15－12:30 授業	The University of Plymouth 訪問
16	土	Lanhydrock House と Looe 観光	
17	日		Cray Art（陶器絵付け）（自由参加）
18	月	09:15－12:30 授業	Saltram House 観光
19	火	09:15－12:30 授業	Peninsula Treatment Centre 訪問
20	水	09:15－12:30 授業	Plymouth Harbor と Mt. Batten 観光
21	木	09:15－12:30 授業	
22	金	09:15－12:30 授業	語学学校でのパーティー
23	土	Plymouth 発 → London 着 市内観光の後自由行動， London 泊	
24	日	午前:自由行動， 夕刻 London 発	
25	月	中部国際空港着	

添付資料 2

訪問した医療機関

The British Red Cross (英国赤十字社 Plymouth 支部)

Derriford Hospital (Plymouth の総合病院)

Peverell Park Surgery (患者の窓口となるホームドクターがいる診療所)

The University of Plymouth (プリマス大学)

Peninsula Treatment Centre (整形外科を専門とする病院)